

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	阿部 雅也
学位	博士(教育学)
学位記番号	新大院博(教)第27号
学位授与の日付	令和3年3月23日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	Investigating the Transformative Power of a Collaborative and Reflective Teacher Development Program: The Case in High School English Education in Japan (教師の変容を促す協働的でリフレクティブな教員研修プログラムに関する研究:日本の高等学校英語科における事例)
論文審査委員	主査教授 加藤 茂夫 副査教授 松澤 伸二 副査教授 グレゴリー・ハドリー

博士論文の要旨

本論文は、日本の高等学校外国語(英語)科(以下、英語科)における現職教員を対象として、当該教科指導の資質向上を目指した、より効果的な研修のあり方を模索することを目的とする。そのために、研究全体を通して Grounded Theory Approach(GTA)の枠組みを採用しつつ、対象とする現職教員が勤務校内外での様々な形態の研修に参加する中で、教師自身の指導理念や指導技術向上への動機づけ、学習者に対する視点の変容について探った。データ収集においては質的データを主に採集・分析対象とし、上記 GTA の枠組みに則りつつ対象教員の変容プロセスを検討し、それに基づいた研修プログラムの提案を試みた。

本論文は、以下のとおりに構成されている。

第一章では、本研究を行うに至る背景が提示されている。とりわけ、日本の教育現場における Can-Do リストの導入や、それに基づくパフォーマンステストなどの指導に関わる評価方法の構築などに伴う形で、より「チームとしての指導」体制の確立が求められていることや、特に阿部氏自身が過去に新潟県立教育センターの英語科指導主事として現職教員対象の様々な研修や現場での指導に携わってきた経験から、教員の多忙化や要求される専門性の高まりなどを背景として、学校内外での協働に向けた研修の機会や、それに伴う意識が希薄になりつつあるなどの懸念が示された。こうした状況下で、各種研修に関わる現職教員の学校内外

での指導理念や協働性の変容についての、実証的研究の広がりが限定的であるとの現状に鑑みながら、本研究に至る経緯が説明された。

第二章では、現職の教員研修に関わる先行研究が示された。とりわけ経験の少ない教師 (Novice Teacher) と熟練した教師 (Expert Teacher) との比較分析に基づいて、ジャーナルやインタビューなどの質的データの分析による省察的アプローチ (Reflective Approach) を取り入れた先行研究を中心に、本論文の前提となる先行研究が提示された。

第三章では、本研究を構成する4つのリサーチの概要が説明された。

Study 1 では、新潟県公立高等学校採用1年目の英語科教員1名を対象とし、6か月にわたって記録された授業ジャーナルの分析を行った。結果として、振り返りの中で被験者が自身を第3者としてとらえる視点、さらに自身を学習者としてみる視点が現れてきたことに加えて、指導に向けた自信の高まりや授業改善への動機づけが強まるなどの変容がみられた。

続く Study 2 では、Study 1 で分析された教師と生徒の英語学習についての考え方の相違を検討する目的で、新潟県公立高等学校・中等教育学校に勤務する35名の現職教員と、当該教員が担当する生徒496名を対象として、第2言語習得理論における基本的な概念に関わる信念の比較を試みた。結果として、いくつかの視点で教師・生徒間の考え方の違いが浮き彫りとなり、とりわけ「行動主義」「生得主義」といった言語習得理論の基本理念において両者の間に顕著なギャップがあることが示された。

Study 3 では、任意参加の研修プログラムに参加した、新潟県公立高等学校・中等教育学校に勤務する経験幅の広い英語科教員20名を対象として、研修への参加を通じた意識の変容について、質問紙調査および半構造インタビューを中心に調査分析を行った。結果として、指導理論の現場における応用の広がり、応用・実践からの多様な学びの促進、さらに実践の振り返りから自身の実践を改善していく動機の拡充など、肯定的な変容がみられた。

最後の Study 4 では、Study 3 での研修プログラムに参加した3名の熟練教員が、それぞれの勤務校において、研修の成果をどのように生かしているか、さらに同じ勤務校の他の英語科教員とどのように協働を行っているか、といった点についてインタビュー形式で調査・検証を行った。結果として、柔軟性を伴った協働、生徒の成長を起点としたゴールの共有、リーダーシップのあり方の変容などについて、研修後に効果がみられた。

第四章では、第三章で説明された4つのリサーチの結果に基づき、高等学校英語科教員の変容モデルが示された。モデルは、3つのプロセスから構成された。1つは「視点のシフト」であり、閉じた自己からチームの包括的な視点へと変容するプロセス、2つ目は「ゴールの効率的な共有」が図られるプロセスと、同じく個人に閉じたゴール設定から、チーム全体の視点でのゴール設定へと変容するプロセス、3つ目は「共創を目指した対等なチーム作り」による柔軟な役割設定を伴う協働への変容のプロセスである。これらの3つのプロセスが循環する形で構成されたモデルが具体的に提示され、次章における研修の提案へつなげた。

第五章では、前章までの考察に基づき実際の研修プログラムの可能性について検討した。すなわち、現場に埋め込まれた学校単位での研修プログラム、リーダーシップの柔軟性とチームの協働に焦点を絞ったワークショップ形式の研修プログラム、さらには、互いにサポートし合うコミュニケーションのあり方を模索するセミナーなどの試みが、教師の肯定的な変容を促す可能性のある研修の形態として提案された。

#### 審査結果の要旨

本論文は、阿部氏が新潟県立教育センター英語科指導主事として様々な研修の企画・実践に携わり、また大学教員となった後も現職の高等学校英語科教員との協働研究プログラムなどを主催し、長期にわたり各種研修プログラムに関わって来た経験をもとに、綿密な調査、分析を行っている。また、英語教育学における研究領域としては第2言語習得や応用言語学に関わる指導理論と実践についての研究が多くを占めるなか、本研究のような、教員養成や研修プログラムについての調査研究は限定的である。加えて、GTAを取り入れた質的研究の枠組みは、本研究の領域においては独自性が認められるところであり、その上で、詳細かつ綿密に考察を加えた教師の変容モデルの構築は、今後の研修のあり方を模索していくうえで有効性が高いものと評価される。また、主として質的研究アプローチを採用しているものの、Study 2では500名を超える教員・生徒集団を対象としたデータ収集も行っており、全体的には量的・質的両面のデータに基づく検証による信頼性の高さも評価できる。

本研究のこれらの強みは、一方で、英語科教育という個別の領域との関係性のあり方において懸念もはらんでいる。すなわち、教員集団の協働のあり方やリーダーシップについての検討は、英語科に特化したものではなく、学校全体、もしくは学校に限らない様々な組織に当てはまる内容である。この点においては長所になりうるものの、英語科教育に特化した本研究の示唆は何か、という観点での独自性において懸念が持たれる。そのうえで、Study 2において、英語学習に対する教師と生徒の信念の比較分析を行い、指導理念の変容に与える影響を量的に考察していることは、その懸念を限定的ではあるが軽減するものであることは指摘する必要があるだろう。

また、本論文の主要目的である変容モデルの構築に至る検証の部分において、質的データから得られた要因以外にも、各文脈（学校現場）において個別の条件が作用している可能性を否定することはできない。しかしながら、こうした文脈の特異性については今後の実践にむけた課題として挙げられよう。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士（教育学）の学位を授与するに値するものと判断した。